View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Miyagi Gakuin Women's University Repository

横溝正史研究

――『鬼火』を中心として――

後藤仁美

1

昭和七年に三〇歳で博文館を退社し、作家生活に入った横溝は、翌年五月に喀血し肺病を患った。『鬼火』は昭和一〇年に書かれた中編で、『新青年』二月号に前編が、三月号に後編が発表された。

中島河太郎によると、「はじめは信州の富士見高原に、後には上諏訪に移って専心療養につとめて」[1]いた横溝は、「一年半たっていくらか健康に自信をもちはじめ」[2]た。それから、「友人の援助を辞退して、おいおい机に向かうよう訓練した著者は、昭和九年の秋から冬へかけて『鬼火』を書き続けた。毎日三枚か四枚しか書けなかった。あとはベッドに仰臥して安静につとめなければならなかったから、つぎに書くべき文章のことばかり浮かんで、かえって心悸亢進（しんきこうしん）を起こし」[3]た。

そんな中で書かれたこの物語は、諏訪の湖の近くにある奇妙なアトリエを、病気療養のために滞在していた「私」が訪れたことから始まる。その中には、百二十号ほどの大きなキャンバスがあり、掛けられていた黒い布を外すと、これまた奇妙な絵を発見する。それは、竜とも蛇ともつかない怪物が、湖に沈む裸身の女にからみついているというものだった。この絵が気になった「私」は、湖畔に住む竹雨宗匠という俳諧師のもとを訪れる。

アトリエは漆山万造という画家が建てたものだった。そして、奇妙な絵は彼と、その従兄弟の漆山代助の合作であることを知る。

この二人には復讐綿々たる因縁の話があった。二人は小学校の時代から互いを敵視していた。何かと争うことが多く、中学に入った頃、万造は少女から預かった代助宛のラブレターを教師の前に落とし、代助を退学に追い込む。ところが、代助は落ち込むどころか、画家になるために遠くの美術学校に転校し、生き生きしているように見えた。それを知った万造は悔しく、自分も画家になることを決意する。画家になった二人は、他の画家よりも互いに負けることを嫌った。万造は代助の絵が気になり、代助の家を訪ねる。モデルはお銀という女で、一度、万造のモデルをしていたことがあった。代助の下書きの絵の出来は素晴らしく、困った万造は、代助が逮捕されるよう計らい、お銀を連れて旅に出る。しかし、旅先で急行列車の事故に遭い、万造は不自由な体になってしまう。顔にはゴムの面を付け、両手にもゴム手袋を付けるようになった。そして、諏訪湖の畔にアトリエを建てたのだった。それから百二十号の絵の制作を始めた。代助は、神経衰弱で入院していたが、脱走して万造のもとに現れる。そこで二人は仲直りをし、万造が代助を逃がそうという話になった。ボートで逃がしてくれるはずだったが、万造は代助を殺そうとする。二人はボートの上で争い、万造のほうが転落し湖底に沈んで行った。アトリエに戻った代助に、お銀は面を被って万造の振りをすればよいと言った。しかし、代助はお銀に一度裏切られているため、彼女を殺し湖に沈める。代助は万造の振りをして、絵を描き続けた。万造が事故で色彩感覚を失ったことを知らなかった代助は、警部にそれを指摘され、ボートで湖へ向かい、彼もまた湖の底に沈んで行った。

そこまで、元警部だった竹雨宗匠が語り終えた時、花火の光芒が鬼火のように湖水を流れて行った。これが『鬼火』の粗筋である。

『新青年』の昭和一〇年二月号は、二上洋一によれば「雑誌発売後差し押さえられ、数ページ削除のうき目にあった。万造とお銀の姦通シーンが当局の目にふれたためである。無論、現在から思えば、それらの描写は、特別凄じいことはない。しかし、当時の状況では、止むを得なかったのかも知れない。」[4]という事件があった。その後、「単行本として出版された際の改訂文が、流布されていたいわくつきの作品である。」[5]とも言われている。

仁賀克雄は『鬼火』について、「横溝正史論」[6]で次のように述べている。

（横溝が）作家として立つや病に斃れ、未だ床に臥した身体で、一日に一枚か二枚ずつ、それこそ全力を傾注して生みだしたこの作品は、諏訪湖辺を舞台に、本家分家の従兄弟同士の深讐の対立を、執拗に又凄絶に書き、鬼気迫るものがあった。そのただ相手に勝たんがための闘争は、一人の女をめぐる愛欲の葛藤を精細に描いたため発禁削除の筆禍にあうほどであった。

作品の行間には、作家として独立し、将来を嘱望された時に病に犯された無念さ、焦燥感、呪詛、憎悪や、探偵小説への情熱などがからみ合い、その悪念がこの作品に一挙に噴き出したという感じがする。ちろちろ燃える鬼火のような執念の凄まじさは、読者をして狂気の淵に追い込む迫力を持っているのである。(7)

これほどの文章を、病に倒れながらも書き続けた横溝は、作家としての生活を諦めたくなかったのだろうと思われる。それでは、『鬼火』の中で、どのような表現がされているのか考察していく。中島河太郎が「漢語をことさらにまじえた美文調が、自然描写の効果を盛りあげて、この凄惨な物語が終局に近づくにつれ、読後深い余韻を響かせずにはおかない。(8)」と評価している。したがって、まずは冒頭の上諏訪の風景描写を見てみよう。

外へ出てみると空には依然として太陽がくるめき、はるか彼方の入江の汀には、洗髪の女が水鏡をしているように首うなだれた、美しい楊柳（やなぎ）の並木があり、並木の下には数十羽の鶩（あひる）が嬉々として群がり、餌をあさっている。空は美泥細工（びいどろ）のように玲瓏と晴れ渡り、澄明な空気は時々水晶のように光るかと思われた。私はこの明るい、平和な景色に向って、喘ぐように二三度大きく息を吸い込んだが、さて一度眼（まなこ）を転じて岬の上を見れば、そこには黠黮（あんたん）たる妖気が低く垂れこめ、索寞（さくばく）たる蘆叢（あしむら）の中からは啾々として哀怨悲愁の声が、道行く人の肺腑に迫ってくるかと思われた。(9)

「私」がアトリエを後にする場面の描写である。「洗髪の女が水鏡しているように」や、「美泥細工のように玲瓏と」「水晶のように光る」といった表現は、上諏訪の風景の美しさを強調している。その中に、「黠黠たる妖気」や「哀怨悲愁の声」を挿入することによって事件性を示唆しているように思える。

安間隆次は「失われた神話の復権」[10]の中で、「激しい妖気をただよわせていて、忘れ難い印象を読者に与えずにはおかない。（中略）この描写の中には、この作品ばかりではなく、横溝正史の戦前の草双紙的世界すべてにわたる特質が極めてあらわにぬりこめられているように私には思える。『微妙に錯綜した嫌悪と歓喜の不思議な感激』が多分作品を流れるモチーフである」と述べている。

しかし、次のような表現は過剰ではないかとも指摘している。

私が入って行くと羽虫どもは、一斉にわんと壁から飛立ったが、いや、その翅音の凄いことといったら、平家の大軍を走らせたという水鳥の音にも劣るまじと思われるばかり、眼も口も開けていられたものではない。

（中略）

隅に立てかけてある大きなカンヴァス。大きさは百二十号くらいもあろうか、黒い布がかかっているのが何となく気になる。こいつは唯では帰れない、といって羽虫は気味が悪いし――と暫く躊躇していたが、到頭思いきって足袋はだしになると、抜足差足、いやもう竜王の珠玉を盗まんとする蜑の如く、そっとカンヴァスの側に近寄ると怖々、静に黒い布をまくりあげて見た。

この部分を安間は、

なりふりかまわず唄いあげ描きあげているようなところがあって、（中略）美文調もここまでくれば行きすぎで空虚さが目につくばかり、「その翅音の凄いことといったら、眼も口も開けていられたものではない」「思いきって

足袋はだしになると、そっとカンヴァスの側に」でよいのではないかと、わけ知り顔して思ったりする。

しかし、こうした描写からつむぎだされる文脈の中にこそ、現代の若者たちは、抑圧から解き放たれる魅力を感じとっているのかもしれないのだ。無感動の中に飼い馴らされてしまっている現代人を、もう一度、闇におびえ、草や木や土の言葉を聞きわける世界に誘う契機となるかもしれないのである。(11)

と分析している。確かに比喩を重ねすぎると、読者がついていけない所もある。安間はそれを批判しながらも、現代人を「闇におびえ、草や木や土の言葉を聞きわける世界に誘う契機になるかもしれない」と見ている。横溝の過剰なほどの言葉は、都会から離れた上諏訪の舞台に入り込ませるには必要な演出なのだと思われる。

次は、「私」が発見した「人獣相剋図」の描写に着目する。

それは活きながら湖水の底に沈められた、裸体の美女を画いたもので、セピア色に塗り潰したカンヴァスの上に、仄白く浮出した女の乳房には、その先に大きな分銅のついた太い鉄の鎖が、痛々しいばかりに食い入り、その下肢から下腹部へかけては、何やら蒼黒いものが、一面にぬらぬらと絡みついている。初めのうち私は、ぬらぬらを単なる水藻だとばかりに何の疑いも挟まなかったけれど、よくよく見ているうちに一条、蛇とも竜ともつかぬ、一種異様な醜い動物のいることを発見した。怪物は鋭い蹴爪をもった一本の肢で女の乳房を引き裂かんばかりに握りしめながら、蜥蜴の肌のように底光のする全身に波打たせて、べったり女の腰に吸い着いている。そして女の背後から肩の上にもたげた醜い鎌首からは、二つに裂けた舌をペロペロと吐出して、何事かを女の耳に囁いているが如くである。女はその言葉を聞いているのかいないのか、あたかも甕を担うが如く左の手で怪物の鎌首を抱え、右手は高く水中にかざしている。彼女の暗緑色の髪の毛は海藻のようにゆらゆらと漾い、悶え、逆立ち、長くさしのべた項には、泡が凝って真珠を連ねたようである。唯不思議なのは女の表情で、その面には少しの恐怖や苦痛の色は見

えないのだ。大きく瞠(みは)った瞳は燐のように瞬いているけれど、それは苦痛や恐怖のためではなくて、ある謎のような欣びと嘲笑を溶かしているが如くである。細く閉した唇からは満足の溜息が洩れ、薔薇色の頬に柔く刻まれた片靨(かたえくぼ)には、微妙に錯綜した嫌悪と歓喜の不思議な感激が読み取られるのであった。

ただ一枚の絵の描写に、このように長く文章をかけるのは尋常ではないだろう。よほど、横溝は冒頭の文で読者を小説の世界に引き込もうとしたようである。この絵から連想されるのは、後に列車事故で顔を負傷し仮面を被るようになる万造と、その世話をしなければならなくなるお銀の描写である。

――お銀や、ええ、何故お前はそんなに泣くのだね。

――いいえ、いいえ、そこを放して下さい。ああ、恐ろしい……逃げやしませんから、そこを放して。……

しかし万造は放しませなんだ。反対に彼はお銀の体をしっかと抱きしめると、暗闇の中での無気味な面をかぶった頬を、お銀の涙に濡れた頬にこすりつけながら、その夜一晩、次のようにお銀を掻き口説くのでありました。

（中略）

――お銀や、お銀や、どうぞそんなに怖がらないでおくれ。そしていつも側にいておくれ、お前に逃げられたらどうしてまあ私は生きていられよう。誰だってこんな恐ろしい、化物よりも気味の悪い顔をした男を愛することが出来ようか。

（中略）

万造はそういう言葉を繰返し繰返しお銀の耳に囁きながら益々烈しく彼女のからだを抱きしめます。男の熱い呼吸はお銀の頬を打ち、どうかしたはずみに面の外に溢れ出した男の涙は灼けつくようにお銀の肌に浸み透ります、お銀は唯もう、恐怖と嫌悪のために身を固くして、上の空で男の愚痴を聞いているのでありました。

このように最初は「恐怖と嫌悪」を抱いていたお銀ではあるが、次第に万造との営みを繰り返して行く内に、万造に魅了されて行くのである。この描写が「人獣相剋図」に似ている。つまり、横溝はこの愛欲の場面を導くために、この絵を用いたのではないかと考える。

それから、人物描写の表現について見て行きたい。次の引用は、竹雨宗匠に関するものである。

宗匠というといかにも老人じみるが、その実、五十にはまだ二三年間があろうという年輩の、血色のいい、どっしりとした人柄で、かつて警部などという劇しい職務にあった人とは思えない程、柔和な容貌をしているがそれでもどうかすると、眉と眼の間に精悍そうな気が動くのは、さすがに争えないものである。

竹雨宗匠についての描写は、「柔和」と「精悍」が顔に混在しているのを、「警部」という過去と「宗匠」の現在になぞらえて表現している。これは人物の生き様が顔に出ると言おうとしているのではないか。それに加えて、宗匠が語ろうとする物語の陰惨さを読者に仄めかすもののように書かれていると考えられる。

そして、宗匠が語る万造と代助の描写にも着目しよう。二人が中学五年になった年の部分である。

この時分になると、二人の性格なり、体質なりの、相違は漸く顕著になって、代助が陽性で、多血質で交際好きなのに反して、万造の方は陰性で、胆汁質でいつも孤独でした。体質に於ても、代助の方が色浅黒く、引緊ったきびきびとした体付きをしているのに反して、万造は色白でぶよぶよと肥って、動作などものろのろしているので、級でも牛という渾名があったくらい、唯一つこの二人に共通している点といえば、相も変らず反発し合う熾烈な感情と、猛烈な勉強家である事ばかりでありました。彼等は依然として級のトップを競い合って居りましたが、自己を優位に保つためには、必しもfair playであることを必要としない、小股掬い、背負投げ、裏切、密告等々、あらゆる卑劣なる手段をも敢て辞せぬ。つまり彼等は、悠々と大空に圏を劃きながら、隙あらば躍り蒐ろうと身構え

ている二羽の荒鷲のようなもので、油断をしていれば、いつ何時、鋭い爪と嘴によって引き裂かれるかも知れないのでした。

中学前まではそれほど違いのない二人であったが、中学になると「相違はようやく顕著にな」る。代助は「陽性」で、万造は「陰性」と明確に対照的であることが書かれている。色黒で引きしまった体を持ち俊敏な代助と、色白で太っていて動作の遅い万造。まるで、見た目が性格に繋がっているように書き分けられている。しかし、対照的には成長しながらも互いに持つ対抗心は変わらない。二人を「二羽の荒鷲」に例え、「油断をしていれば、いつ何時、鋭い爪と嘴によって引き裂かれるかもしれない」緊迫した空気と憎しみの感情が、二人の間にあることを横溝は強調している。

今度は、お銀の描写を考察してみよう。

お銀というのは、虚栄心の強い、自堕落な、浮気っぽい、嘘吐の、どこに一つ取柄のない女でしたが、古い言葉にもある通り、有為な才幹を持って高尚な男子の運命を左右するのは、常に優れた女性であるとは限りません。こういう何の取柄もない突転の女が、しばしば男を破滅の淵に導くものです。

不思議なことには、お銀という女は代助と同棲する以前に、かつて一ヶ月程、万造のアトリエでモデルとして働いたことがありまして、その時彼女は、この女らしい浅墓な媚態の限りを尽くして、万造を誘惑しようと試みたのですが、彼女の性質をよく知っていた万造は、頑強にそれを拒み通して来ました。ところがその女が今、従兄弟と同棲を始めたとなると、万造の彼女を見る眼はまた違ってくるので、（中略）今更の如く燐を塗りこめたような妖しい耀きを持つお銀の肌が、世にも尊いものに思い做され、近頃喧伝される白痴美とは、取りも直さずお銀のような女を言うのであろうと惜まれ、はては如何にもして、あの女を一度自分のものにせずには惜かぬと、邪な肝胆を砕くにさえ至ったのです。

このように、お銀は自分の体を使って万造を誘惑し、代助への対抗心をたき付ける役割を持つ女として書かれている。「こういう何の取柄もない突転（つつころばし）の女が、しばしば男を破滅の淵に導くものです。」と書くことによって、お銀もまた物語の悲劇の暗喩に使われているように思われる。

これまで見て来たように、探偵小説にとって人物描写は重要なものなのである。横溝は、表現に注意を払い、読者に印象付けようと詳しく書いていたのではないだろうか。

これからは、万造が被っている仮面の描写について見て行きたい。

その顔。――おお、それは何という奇怪な顔でありましたろうか。柔かい、スベスベとしたゴムで拵えてあるその仮面というのは、世にも精巧にできておりまして、ちょっと見るとほんものの顔と間違えるくらいでありました。しかもその顔と来たら、前にも言いましたとおり、この世のものとは思えないほど、端正に、艶麗に、そして妖冶（ようや）にさえできていまして、心持ち開いた唇からは今にもにおやかな笑い声がこぼれるかと思われるばかり、白い、ふくよかな両の頬には、いつも小指の先で突いたほどの靨（えくぼ）が刻まれていまして、その靨ときたら、万造が怒っていようが、泣いていようが、一切かけかまいなしに、いつでも嫣然（えんぜん）として美しい微笑を含んでいるのです。そういう蠟（ろう）のような仄白い顔が、薄暗い奥座敷のすみっこに坐ったまま、朝から晩まで同じ表情でもって、じっと部屋の一点を見つめているところを、まあ一つ、想像して御覧なさい。お銀でなくてもだれだって、ゾッとするほど気味悪くなるじゃありませんか。それにもう一ついけないことは、お銀はその仮面の下に隠れている、それよりもさらに数倍も恐ろしい顔を、ちゃんと知っているのです。彼女はその恐ろしい顔を想い出すことなしには、万造の奇妙な仮面を見ることができません。

「その靨ときたら、万造が怒っていようが、泣いていようが一切かけかまいなしに、いつでも嫣然（えんぜん）として美しい微笑を含んでいるのです。」と書くことにより、仮面が本当の顔を隠すという役割が一層、万造とお銀の関係を妖しくして

いるように思う。

さらに、仮面の下の顔についての表現を見てみよう。

それは世の常の怪我や火傷（やけど）とは全く類を異にした、お話にならない程、物凄いもののようであったようです。さあ、何といって形容したらいいのか、例えていってみれば、泥で拵えた人形の首を、土がまだよく乾ききらないうちに、悪戯小僧がやって来て、濡れ雑布か何かで滅茶滅茶に引掻き廻した揚句、パレットの上の絵具をべたべたと出鱈目になすり付けたような顔――とでもいえば、幾分なりとも髣髴とさせることが出来るのかも知れません。兎も角それは、顔というよりもかつて顔のあった廃墟といった方が正しいようで、くちゃくちゃに縮れた、赤黒い一個の肉塊にしか過ぎなかったのです。

画家の物語であるだけに「泥で拵えた人形」や「パレットの上の絵具」といったモチーフで表現しているが、後半の「顔というよりもかつて顔のあった廃墟といった方が正しいようで、くちゃくちゃに縮れた、赤黒い一個の肉塊にしか過ぎなかった」という表現が凄みをもたらしているように感じられる。

続いては、代助が誤って万造を湖に沈めてしまった直後の場面の表現を見て行く。

舷（ふなべり）から半身乗り出した代助は、ゴーゴンの首を見たポリデクテズ王の如く、そのまま石人と化し果てるかと疑われるばかり、立ち騒ぐ波、蘆の穂を吹く風の音も、彼の注意を奪うことはできませなんだが、稍（やや）あってふと気が付いたというのは、舷を握りしめた手の甲に、ポタリと落ちて来た何やら温いもの。と見れば、蜘蛛が脚を展げたような、黒い斑点が、ポッチリと手の甲に着いています。おやと思う拍子に又一つ、更に続いて二つ三つ四つ。……代助は幼い時分から何かにひどく興奮すると、よく鼻血を出す癖がありましたが、今彼の手の甲を斑々と紅（あけ）に染めているのは、その鼻血でありました。しかもその時の鼻血たるや、いまだかつて代助が経験したこともないほどの

すさまじさで、縷々として、滾々として、滴々として鼻孔の奥より湧き出ずる生温かい血潮は、殆ど止まる時がないのではないかと思われるばかり、代助は恟然と眼を瞠って、斑々として彩られて行く舷をながめていましたが、やがて名状しがたい恐怖を感じると、呀と叫んで船底に打ち倒れました。

この場面では、従兄弟を沈めてしまったという事実に驚愕する代助の様子が書かれている。「ゴーゴンの首を見たボリデクテス王のように、そのまま石人と化し果てるかと疑われるばかり、」の部分からは、石人になってしまったかのような硬直した代助の様子が表現されている。また、興奮した時の癖という鼻血の流れる表現も恐怖を静かに増長させて行っている。

次は、この場面の続きから、代助の心情の描写について考察して行きたい。

ああ、あの時彼の胸中を吹き荒む飈風は、真黒な旋風を作って、黠黯たる絶望の彼方に彼の想念を運んで行きます。恐ろしい従兄弟の断末魔の光景は、執念く彼の眼底に灼きつけられ、悲痛な従兄弟の最後の声は、未だ嫋々として彼の耳底に鳴っているかと思われます。しかも代助は今潸潸として涕いている自分に気が付き愕然としました。何のための泪ぞ。何人のための歎きぞ、万造の死を悲しんでいるのであろうか、否！否！己を陥れ己の生涯を滅茶滅茶に叩き潰した憎むべき万造、今また己を計らんとして、却って自らその罠に落ちて死んだ万造、手を拍ってその死を嘲りこそすれ、一滴たりとも彼の為に流す泪があろうとは思われぬ。しかし、しかし、ああ、胸を打つこの寂寥、魂を揺すぶるこの悲愁は、いったい何のためでありましたろうか。……

万造の「断末魔の光景」と「悲痛な最後の声」が、「執念く彼の眼底に灼きつけられ、（中略）嫋々として彼の耳底に鳴っている」と書くことによって、死してもなお二人の争いが続いて行くことを隠喩していると思われる。そして、血の次は涙である。「何のための泪ぞ、何人のための嘆きぞ、」と代助は考える。万造の死への悲しみは否定しながらも、

流れる涙に戸惑いを隠せない代助を書いている。この部分は、昔から争い合って来た仲でも血が繋がる者同士の心に共存する愛憎を表しているのではないだろうか。

そして、裏切ったお銀を殺し、遺体を代助が湖に沈める。それを河沿いにある遊郭の塔の上にいた男が見ていたという場面を考察する。

どうした機(はず)みか舟がくらりと傾いて、その拍子にこの男はもんどり打って水の中へ落ちました。もとより浅い場所ですからすぐに起き直りましたが、その途端塔上の男はゾッとばかりに全身に鳥肌が立つのを覚えました。無理もありません。今水より起き上った男の体は、まるで燐を塗った如く煢煢(けいけい)として光を放ち、その妖しい光の中で彼はハッキリとあの無気味な白い仮面と、胸に抱いている人間の形を識別することが出来ました。そしてそれ等のものからポタポタと落ちる滴は、恰も人魚の涙ででもあるかのように閃々(せんせん)として金色に輝いています。塔上の男はむろんこの土地のものでしたから、諏訪の湖に夜光虫のいるということは知っていましたが、このように綺麗なそしてまたこのように恐ろしい風景は未だかつて見たことがありませなんだ。何となくそれはこの世のものというよりは、遙かに夢魔の世界の出来事とも思え、全身から燃え上がるような燐光を放っている、この奇妙な仮面の男は、人間というよりも地獄の底から這い上って来た悪魔のようにも見えるのでありました。

この場面では、諏訪湖の夜の風景と出来事を奇怪に表現している。「男の体は、まるで燐を塗った如く煢煢(けいけい)として光を放ち、」や、「ポタポタと落ちる滴は、恰も人魚の涙ででもあるかのように閃々(せんせん)として金色に輝いています。」といった、夜光虫の放つ無気味な光が闇夜に浮かび上がる様子を表している。綺麗だが、それと同時に恐ろしい風景というのを、事件に関わりのない「塔上の男」が目撃する点が重要な所であると思われる。読者が「男」の目を通して見ているかのようにさせ、代助の名前を使わずに「仮面の男」と表現することによって、奇怪さを増幅させているように感じられる。そして、「この奇妙な仮面の男は、人間というよりも地獄の底から這い上って来た悪魔のようにも見えるので

ありました。」という文章には、横溝の戦後に代表される「金田一耕助シリーズ」のタイトルにしばしは使われている「悪魔」が出て来る。「悪魔」は横溝の探偵小説を彷彿させる一つの象徴と見られる。

2

『鬼火』のテーマについて中島河太郎は次のように述べている。

> 話者が「二人の画家の生涯にまつわる、深讎綿綿たる憎念と、嫉妬と、奸策の物語」だとその性格を断っているが、そこに用いられた「深讎綿綿」という形容は、黒岩涙香の造語であって、このことばほどこの物語を的確にとらえたものはない。仮に他人同士の憎悪相剋であったなら、もっと容易に解決がつくかもしれない。なまじ従兄弟同士で、血縁の者だけに、徹頭徹尾生命を賭けて争わなければならなかったのであろう。(12)

中島が引用しているように、『鬼火』の本文で話者（竹雨宗匠）が語り始めに断っている点が、そのまま横溝の狙いを表していると思われる。わざわざ「深讎綿綿」という涙香の造語を用いて文章にしたということは、この言葉通りの血が繋がった者同士の深い綿密な争いが『鬼火』のテーマであると言えるのではないか。

テーマに関して、安間も次のように述べている。

> 横溝氏の戦前の作品は、多くが「変格もの」で、事件を余詰のない合理的な結末にみちびくことを主な目的としていない。人間の心の中にある愛憎や恐怖や幻想の深淵をあばきだし、白日の光のもとにさらすことに作家的努力を傾注している。（中略）もっといくらでもミステリアスな仕立てにすることもできた。
>
> そうしないで、あえて泥くさい、思いきりけばけばしい色彩を使って、人間の心の根に重点をおくことにしたの

は、大衆読物として中途半端でもの、どうせ描くならとことん面白いものを、という気持ちが作者に働いたのではないか。面白い小説には、笑いと恐怖は欠かせない。その恐怖とそれに結びついた死を、大衆的な読物の中に扱う場合は、むしろ徹底して虚構に飾りたてた方が……という、ある意味では、むしろ逆に一種神をおそれる思いが作者の中に動いたのかもしれない。思いきりどぎつく惨酷に描かれてはいても、作者の筆の下には、面白い読物を書いているというサービス精神がどっかと腰をすえているために、読者はこわごわ、同時に安心して、いくらでも読めることになる。『鬼火』などを読みかえしてみると、徹底して俗につきながら、これは見事にその向うに突きぬけているとさえ、私には思えるのである。[13]

安間が述べる通り、戦前の横溝の作品には「変格もの」が多く見られる。当時「変格もの」は、本格物に比べると、「大衆読物」とされ評価が低くなされていた。しかし、『鬼火』は「徹底して俗につきながら、これは見事にその向うに突きぬけている」と、安間はまずまずの評価をしている。「横溝は「事件を余詰のない合理的な結末にみちびくことを主な目的としていない。人間の心の中にある愛憎や恐怖や幻想の深淵をあばきだし、白日の光のもとにさらすことに作家的努力を傾注している。」と言われているように、この時期の作品のテーマは「人間の心の中」であった。

それから戦中には禁止されたために探偵小説を書くことは出来なかったが、疎開先の岡山で温めていた構想が、戦後になり解禁されると本格物に変わり「金田一耕助シリーズ」に繋がって行くのである。

3

『鬼火』の前篇が昭和一〇年二月号の「新青年」で発表された時、予期せぬ問題が起きた。それについて、中井英夫は「血への供物　正史、乱歩、そして英太郎」[14]で次のように述べている。

「新青年」に『鬼火』の前編が発表されると、たちまちそれは発禁の厄に遭った。実に何とも詰まらない理由で、要するにこのころの内務省の役人は、社会主義というものがこの世に存在することさえ秘匿しようと躍起だった。（中略）

もっとも発禁といっても、雑誌そのものが発売禁止になったのではない。書店に積まれた雑誌から問題の箇所を破り棄てればそれでお目こぼしにあずかった（中略）

『鬼火』でいえば二月号の３７ページから４６ページまでを破れという愚かな至上命令は、それでも徹底したものだったと見え、いま残っている「新青年」はことごとくその状態の欠陥本となっている。

このような訳で、『鬼火』の前篇は十ページ近くを除いて「新青年」が発売された。

現在残っているテキストは、日下三蔵[15]によると、「削除部分をつないで文章を整えた流布版」、「後に発見された削除部分を初出の後に付した桃源社版」、「削除部分を本編に挿入した創元推理文庫版」であるという。このように複数のテキストが存在することが判明し、インターネットで調べてみた。ウィキペディア「鬼火（横溝正史）」のページ[16]には、

昭和１０年（１９３５年）に同タイトルの短編集（春秋社版『鬼火』）に収録の際、著者により削除個所の補填改稿がなされ、以来、長らく春秋社版テキストが流布していたが、昭和４４年（１９６９年）に刊行された桃源社「鬼火・完全版」は、幸いにして削除の難を逃れた「新青年」を中川英夫が保有しており、これを基に刊行されたものである。また、昭和５０年（１９７５年）に発売された角川文庫版に「鬼火」は、この桃源社版「鬼火」が底本とされるも、さらに著者が大幅な加筆修正を行った。この角川版の校正には中島河太郎があたっている。

そして、後年出版された、創元推理文庫「日本探偵小説全集９・横溝正史集」は、角川版を底本としつつ、「新青年」掲載の折に当局から削除を求められた部分をゴシック体で表現、さらに当時の挿絵を描いた竹中英太郎の挿絵が全て収録されている。こういった点からも、「鬼火」は、この創元推理文庫版が決定版であろうと思われる。

とある。まとめてみると、日下のいう「流布版」は春秋社版『鬼火』、「桃源社版」は桃源社「鬼火・完全版」、「創元推理文庫版」が創元推理文庫『日本探偵小説全集9・横溝正史集』ということになる。

ウィキペディアで「決定版」とされている創元推理文庫と、角川文庫（角川版）では、前篇はそのままであるが、何故か後篇に加筆修正が集中している。これはどういうことなのだろうか。

以下、創元推理文庫版を用いて前篇の削除された部分を明らかにし、後篇の加筆修正された箇所を考察して行く。

まずは、削除されたという創元推理文庫版にゴシック体で復刻されている部分を引用して、考察してみたい。

代助のアトリエで、代助の留守に万造とお銀があやしい雰囲気になる場面である。

――あら、狡いわ。それを見ちゃいけないのよ。早く此方へ来て頂戴てば。よう。よう。

お銀の甘ったるい声にふと我れに還った万造は、酔えるが如く蹌踉と彼女の方へ近付く。お銀は先きからにやにやしながらわざとらしく椅子の上で地団駄を踏んでいましたが、彼の体が間近まで来た時、ふいに踉けたように万造の肩につかまりました。

――まあ、酷いわ。

軽羅を通して、お銀のむっちりとした肉置が、絡みつくように万造の体を圧迫します。洗い髪がさらさらと頬に触れます。灼けつくような女の呼吸と、噎るような体臭が万造の神経を昏迷させます。万造はふいに女の体を抱き寄せると、ああ、人間の心は何という複雑さを持っているのでしょう、瞳はかの素描の上に釘着けにされたまま、唇は、低い、勝ち誇ったような笑い声を立てている女の唇の上に、しっかりと押しつけてしまったのです。

確かには「軽羅を通して、～万造の神経を昏迷させます。」の部分は当局の目には卑猥なものとして映ったとしても仕方がないかもしれない。代助という存在がありながら万造を誘惑するような行為は倫理に反することである。

次の部分は、代助が出掛けるのを待ち、お銀と万造が会う場面である。

代助が支度をして出て行くのを待ちかねたように、お銀は万造の側に寄り沿うと、手をとって、ねっとりと指を絡ませながら、――憎らしい。帰る帰るって、厭よ。

――何、あれは擬装（カモフラージ）さ。ほんとうはこうして、お銀の方と。……

お銀は口を塞がれたような笑い声を立てていましたが、暫くしてつと男の腕から離れると、おくれ髪を掻きあげながら、

――そうそう、あたし忘れないうちに牛肉を買って来とくわ。いつも晩の支度を忘れるってお目玉を貰うのよ。

――うん、行って来給え。

――帰っちゃ厭よ。直ぐだから。

この部分も「手をとって、ねっとりと指を絡ませながら、」という所が削除に繋がってしまったように見受けられる。最後の引用は長い部分である。

その時代助の留守宅では、雨戸も繰らない薄暗い茶の間で、お銀が唯一人、寝そべったまま詰まらなそうな顔をして新聞を読んでいましたが、万造の顔を見るとちょっと色を変え何を思ったか、やがて妙な笑い方をすると、

――ひどい人ね。と低い声で詰（なじ）るように言いました。

――何さ。万造は懐手（ふところで）をしたまま、にやにや笑いながらお銀の顔を見下ろしています。

――あんたでしょう。あんな悪戯をしたのは。

――何の事だね。さっぱり分からんが。

――憎らしい！駄目よ、白ばくれたって。あたしちゃんと知ってるわよ。どうも変だと思ったのよ、この間。――

待っていらっしゃいと云っといたのに帰ったでしょう。あの時行李の中を見たのでしょう。きっと。

――知らんね、一向、……何の事だね。

――嘘吐き！　悪い人ね。代助に若しもの事があったらどうしてくれるの。

――所がちゃんとそうなって居るんだよ。

――あら、どうなの。

――実は今、警視庁からの帰途なんだがね、どうもいけないらしいよ。代さんはほら、例の頑固さで、警官の訊問に対して卒直に答える事を拒むらしいんだね。それですっかり心証を悪くしているらしいから、あの調子だと、まだまだ帰れそうにないね。ひょっとすると、今年一杯は駄目かも知れんぜ。

――あら、それじゃ困るわ。お銀もさすがに寝ていられないという風に起き上ると、あたし新聞にも出ないくらいだから大した事じゃないとばかり思っていたのに。

――新聞にも出ないのが曲者さ。悪くすると二三年喰い込むことになるかも知れないよ。

――あら、厭だね。姐やは逃げてしまうし、近所では妙に警戒するらしいし、第一、あの人が帰って来なきゃお小遣いにも困るわ。

お銀のすっかり困じ果てた顔を、万造は不相変にやにやしながら見ています。

――笑いごとじゃないわよ。憎らしい。あたしの身にもなって頂戴よ。元はと云えば皆あなたからよ、悪い人ね、ほんとうに。

――だからさ、その相撲に来てやったんじゃないか。どうだい、一つ旅行しないかい。

――一二ヶ月関西方面で遊んで来ようかと思うんだ。どうせ今年は仕事なんか出来やしないし、それに何彼と面倒な事が起こりそうだからね、お前もその気があるなら連れてってやるよ。

――まあ、嬉しい。お銀はいきなり万造の首っ玉に　りついて、所構わず滅茶苦茶に唇を押しつけていましたが、ふと気がついたように、だけどこの家はどうするのさ。

――放っとけばいいじゃないか。どうせお前の家じゃないんだろう。
――それもそうだけど、随分薄情な話ね。
――薄情はお互いさまさ。今更そんな事が云えた義理かい。最初に水を向けたのは誰だっけね。
――ほほほほ！　お銀は得意そうに眼を耀かしながら、それじゃあんたがこんな酷いことをしたの、矢張りあたしのため？
――御推量に委せます。この性悪女め！
――それから暫く、お銀の擽ったそうな笑いが、締め切った家の中に断続していましたが、やがてそれもふっと切れると、何をしているのか後は空家のように森と静もり返ってしまいました。

二人が大阪へ旅立ったのは、その翌日の事でありましたが、後になってこの時の事を思えば、万造にとってはこの旅行こそ人生に於ける歓楽の最後でありました。自分のものにしてみると、お銀は実に得難き宝玉で、彼女の素晴らしい肉体、飽くことを知らぬ歓楽の追求、それは万造の官能を麻痺させずには措かぬものでしたが、それよりも更に彼を喜こばしたのは、彼女のこれっぱかしも反省や悔恨を持たぬ、出鱈目極る魂でした。彼女には過去もなければ未来もありません、唯もう滅茶苦茶な現在の歓楽への追求があるばかりなのです。

万造はこの関西旅行の二ヶ月間を、我から求めてそれに趣いた傾きもありますが、完全に彼女の捕虜となり、溺れ呆けて、苦い思い出の呵責を、粘っこい彼女の唇の感触によって忘れる事が出来たのです。

前半の箇所は、それほど問題があるようには見られない。しかし、万造が代助を事件に巻き込まれるよう仕向けた行為は、社会的に問題視されてもおかしくないだろう。また、後半の「お銀は実に得難き宝玉で、彼女の素晴らしい肉体、飽くことを知らぬ歓楽の追求、それは万造の官能を麻痺させずには措かぬものでした」という表現は卑猥に捉えられることは否めないと思われる。

次に、加筆修正がされている『鬼火』後篇について見ていきたい。「新青年」に掲載されたものと、『新版横溝正史全

集二　白蠟変化』（昭和五〇・六　講談社）に収録されているもの、創元推理文庫版（『日本探偵小説全集9・横溝正史集』昭和六一・一）に収録されているもの、角川文庫版（『鬼火』昭和五〇・八）を比較し考察していく。

なお、以下「新青年」に収録のものは「新青年」、『新版横溝正史全集二　白蠟変化』のものは全集、創元推理文庫版は創元版、角川文庫版は角川版と呼ぶ。

まずは、「十二」の、深夜の湖にお銀の遺体を沈める代助の描写である。「かの奇怪な假面の男は、人間といふよりも地獄の底から這い上つて來た悪鬼のやうに見えるのでありました。」という部分である。「新青年」では「悪鬼」が使われている。創元版・角川版も同様なのであるが、全集では「悪魔」となっている。何故かは不明である。

次は「十三」で、「新青年」と全集にはないが、創元版・角川版には冒頭に天気の描写が加筆されている。創元版の文章を引用する。

その翌日は朝から妙に蒸々とする陰欝なお天気でありましたが、午過ぎに至って古綿のような雪が、いよいよ低く垂れて来たかと思うと、下界は突如として日蝕にあったように、暗澹たる悪気の中に閉じ籠められ、何となく不安な予感が四辺を圧し、湖畔に住む人々の心を脅かすようでありました。

湖水は巨大な鉛の坩堝と化して、死のような静寂を湛えています。風はひねもすうち絶えて、湖畔の蘆の葉も、樹々の梢も、化石したように黙して動かず、万物悉く凝って、大磐石になったのではなかろうかと思われるなかに、悠々とひくく輪を画いて飛ぶ黒い鳶の影だけが、凶兆を知らせる不吉の使者のように見えました。空気は蠟のように重く、息苦しく、日頃は千変万化の情趣を見せる湖畔の山々も、今日は唯灰色の塊りとなって、混沌たる雲のかなたに打ち沈んでいます。人も犬も牛も鶏も、生きとし生けるものはことごとく、窒息したように塒の奥深く閉じ籠っていると見えて、湖畔は一瞬、廃墟のようなわびしさに包まれました。

そういう銅版画のような寂寞のなかを、喘ぐように自転車を操って、今しも岬の突端にあるかの万造のアトリエを訪ねて来たのは、いうまでもなく例の警部でありましたが、

「新青年」と全集では、この文章がなく「その翌日警部が訪ねて來た時、」から始まっている。この天気の描写が事件を示唆しているように読者に想像させる。これをねらって横溝が加筆したのではないかと考えられる。

続いては、警部が通いの「媼さん」に、行方不明のお銀について訊いている場面の描写である。

——媼さん、奥さんは昨日何時ごろにお出かけになつたのだね。

（中略）

——何かそのやうな話が前にあつたのかね。

——いいえ、一向承つてをりませんでしたが・・・・

ここまでは全て同じであるが、創元版・角川版には次のような部分が加筆されている。

——昨日、奥さんの素振りに何か日頃と違ったところがあったかね。

——さあ、何ですか、一向。私はぼんやりなもんですから。媼さんはなるべく当たり触りのない言葉を選びながら、軽い薄笑いを泛かべています。

警部と雖もその時はまだそれほど深く、お銀の行く方を怪しんでいたわけではないのですが、さっきから心に蟠っている滓のようなものが気になって、何となくその場を立ち去りかねていたのです。

——どうも、妙だね。

——そうでございますかしら。媼さんはそう言いながらふいにギョッとしたように向うを向くと、

そして、この後に「おや、あれは何でございましょう、ロロの声ではございませんか。」という台詞が続く。

それから、「新青年」と全集では「媼さんに云はれてふと犬の呦聲のする方を見れば、かの蘆の浮洲のうへを悲しげな聲をあげて呦きたてながら、躍り狂ふやうに跳ね廻つてゐる白い動物の姿が見えました。」と書かれている。ここは、創元版では次のように加筆修正されている。

成程どこやらで歔欷くような犬の啼き声がする。重い空気を憾がして、何事か訴えるような、世にも悲しげな、陰々たる犬の啼き声が長く尾を曳いて、湖水の方から聴こえて来るのです。

――ああ、向こうです、向こうです、まあどうしたのでございましょう。

媼さんの後について岬の突端まで出て見ると、成程、向こうの蘆の浮き洲のうえを悲しげな声をあげて喧きたてながら、躍り狂うように跳ね廻っている、白い動物の姿が見えました。

創元版・角川版の方が、犬ロロの奇妙な行動が更に書き加えられている。次もまた、ロロについての描写に修正が見られる。「新青年」と全集では、

水溜の周圍を跳ね廻つてゐたロロが、ふいに脚を取られたのかズルズルと泥の中にめり込むと、何かしら巨きな生物がその中に潜んでゐて、脚を持って引き摺り込むように、けたゝましい呦聲をあげながら、ロロの體は見る見るうちに泥の中に引き込まれてしまひました。

となっているが、創元版・角川版では次のように改められている。

水溜まりの周囲を跳ね廻っていたロロが、ふいに脚を取られたようにズルズルと泥の中に滑り込みました。すると、何かしら巨な生物がその中に潜んでいて、脚を持って引き摺り込むように、ロロの体は次第に水溜まりの中へ

沈んで行きます。ロロは必死となって、前脚で泥のうえを掻き廻していますが、そうするうちにも全身は刻一刻と泥の中に呑まれて行き、今ではもう藻掻く気力さえなくなって行く様子です。

——ロロや！　ロロや！　どうしたの、早くこちらへおいで！

媼さんの声が耳に入ったのでしょう、ロロは狂気のように呴きたてながら、ひとしきり泥のうえをバタバタやっていましたが、間もなく歔欷くような一声を湖水のうえに残したまま、その体は全く泥濘の中に呑み込まれてしまいました。

前者には先走っているような印象があり、ロロが沈んで行く様子が性急過ぎる気がする。一方、後者では次第に無情にも呑み込まれて行く姿が描き出されている。

続いて、その光景を見ていた警部の様子の描写が、「新青年」と全集では、

片時もお銀の傍を離れぬといふ狆ころのロロが、今目の前で恐ろしい泥の中に呑みこまれて行くのを見てゐるうちに、先から彼の胸中に蟠つてゐた疑問が、釋然として氷解してゆくのを感じました。

と書かれている。ここで「狆ころのロロが」という箇所があるが、創元版では「狆コロが」となっており、角川版では「狆ロロが」になっている。揺れている所ではあるけれども、ストーリーには深く関連しないため、編集によって表記がまちまちである点は深い意味はないように感じる。

また、創元版と角川版で、「今目の前で～」の前に「狆コロが水の上を渡る危険を冒してまで、あの浮き洲へ行ったのは何のためであろう、気狂いのように吠えたてながら、彼女は一体何をあの水の中に求めていたのだろう。更にまた、一瞬にして狆コロの体を呑みつくしたあの気味の悪い水溜まりは、一体どういうわけであろう。」という警部の思考の加筆がされている。この部分は、推理しながら読む読者に横溝が与えたヒント・思考の時間なのではないかと思う。

更に、「新青年」や全集で「先から彼の胸中に蟠つてゐた疑問が、釋然としてゆくのを感じました。」の部分は、創元版と角川版では「―そういうことを考えているうちに、警部は、縺れた糸がほぐされてゆくように、さっきから胸中に蟠っていた疑問が、次から次へと氷解してゆくのを感じました。」となっている。

この場面の警部の描写の次は、万造に成りすました代助の描写にも書き加えられている部分がある。「新青年」や全集では次のようになっている。

代助もその時、窓際に立つてあの浮洲のうへを眺めてゐましたが、警部の足音に何氣なく振り返るとぎよつとしたやうにそこに立ち竦んでしまひました。暫く二人は石になつたやうに凝と互の眼の中を覗き込んでゐましたが、やがて警部の方が魂も潰えるかと思はれるばかりの悲痛な呻聲をあげました。

しかし、創元版・角川版では、「～立ち竦んでしまひました。」の後に、「たった今出て行ったばかりの警部が、どういうわけで引き返して来たのか、そしてまた、相手の容易ならぬ面持ちが何を意味しているのであるか。代助は咄嗟の間に恐ろしい意味を読み取ったのに違いありません。」という一文が補足されている。それから、「やがて警部の方が～」の所も、「やがて魂も潰えるかと思われるばかりの、悲痛な呻き声をあげたのは、代助ではなくて却って警部の方でありました。」と修正されている。この二つの補足・修正が加えられたことで、情感の増幅に繋がっている。

そして、警部が代助に真実を問う場面である。「新青年」と全集では、

――萬さん、あなたはほんたうに萬造君ですか。それとも、ああ、私があれ程探ねてゐたもう一人の人物ではありませんか。

その途端黒い袍衣に包まれた代助の體は、旋風にあつた木の葉のやうに、チリチリと顫へあがりましたが、それを見ると警部はもう一度肺腑を貫くやうな深い溜息を吐きました。そして絶望的な眼差で今自分の眼前に立つてゐ

る男の姿を視つめながら、息も絶え絶えに次のやうなことを言ひました。

となっているが、創元版・角川版では、警部の台詞の後に「そういって警部はどっかとそこにあった椅子に腰を落としましたが、」という文が挿入されている。また、代助の描写は「チリチリと顫えあがりました。」で一度終わらせ、「警部はそれを見ると思わず両手で頭を抱え、」という警部の描写が加えられている。更に、「深い深い溜息を吐きました」の後に、「が、それでも漸く気を取り直して頭をあげると、」と加筆されている。

そして、警部がかつて万造から打ち明けられた話をする場面である。「新青年」と全集で、台詞の中に「私の住んでいる世界は冷い灰色の壁に包まれてゐて、そこには私の心を慰めてくれるやうな、美しい色彩を持った物象は何一つありません。」という部分がある。創元版・角川版では、その後に「むろん私は、何とかしてこの恐ろしい味気ない、呵責から逃れようと、随分いろいろな医者に相談してみました。しかし一人として自信をもって治癒に当たろうとする医者はいなかったのです。」という加筆がされている。

また、「新青年」と全集では、「あの危禍の後はじめて繪筆をとつた時、私は絶望のあまりお銀を絞め殺そうとさへしたくらゐでした。」となっている部分が、「思えば私はあの大惨事の折りにいっそひと思いに死んでいた方が、どんなによかったか知れないのです。実際私はずっと後になって、はじめて絵筆をとったとき、絶望のあまりお銀を絞め殺して、自分も死のうと思ったくらいでした。」と書き直されている。その後、「新青年」と全集で「あゝ、私は畢竟ミネルヴァに見放された惨な人間なのです。」と続く箇所は、創元版・角川版では、「ミネルヴァ」が「美の女神」に変更されている。

それから、同じ台詞の中であるが、「あなたがほんたうに萬造さんであるなら、私は今この繪を見て、あなたの恢復に對して心からの祝福を申上げます。」の後に「新青年」と全集にはないが、創元版・角川版には、「この絵の色彩の配合には、少しも不自然なところや、盲目的なところがありませんから。」と文が加筆されている。そして、「本當の萬造さんやお銀さんはどこにゐるのです。」の後に、創元版・角川版では、「もしやもしや……今ロロを呑み込んだ、あの薄

気味の悪い、浮き洲の上の泥々地獄の中にでもいるのではありませんか。」と補足されている。この表現が加えられたことで、「泥々地獄」の無気味さが引き立てられているのではないだろうか。

この後は警部の台詞が終わり、「新青年」と全集では「警部はこの時ほど〜」と続く。しかし、創元版・角川版では、「警部はそこで言葉をきると、きっと代助の方を凝視しました。生憎白い仮面を被っているので彼がその時どういう表情をしていたが（「か」と思われる）、知るよしもありませんが、」という文が挿入されている。

次は、警部の言葉を聴いていた代助の描写について「新青年」と全集では、

警部はこの時ほど人間の激しく痙攣する姿を見たことがありません。先からテーブルの上に両手をついたまゝ、呆然として警部の面を見守つてゐた代助の體は、恰も錐で揉み込むやうに、或はまた電氣獨樂のやうに、頭の頂邊から足の爪先まで、チリチリと戦慄して歇みませんでしたが、

となっている。創元版・角川版では、「〜両手をついたまゝ、」までは同じだが、「上体を乗り出し、呆然として警部の話に耳を傾けていた代助は、警部の話が進むにしたがって、次第次第に全身を細かく顫わしはじめたが、やがて錐で揉み込まれるように、或いはまたとめどもなく廻転する電気独楽のように、顫えて顫えて、あるいはこのまま顫え死にに死んでしまうのではなかろうかと思われるほど、激しくチリチリと戦慄して歇みませんでしたが、」となっており、代助の痙攣する様子に磨きがかかっている。

今度は代助の鼻血についての表現である。「新青年」と全集では、次のように書かれている。

止めようとしても止まるべくもあらぬ鼻血が、縷々として、滾々として、滴々としてテーブルから床の上に降り灑ぐのでした。代助はふいに、低い、冷嘲するやうな笑聲を立てました。それから蹣跚たる歩調で露臺へ出て行きましたが、その時警部はハツキリと彼が跛を引いてゐる事を認めたのです。

それが創元版・角川版では、次のように加筆修正されている。

止めようとしても止まるべくもあらぬ鼻血が、縷々として、滾々として、滴々としてテーブルから床のうえに降り灑ぎ、斑々として彼の胸をべにがら色に染めました。代助はしばらく恟然として眼を瞠りそれを見詰めていましたが、やがてひくい冷嘲するような笑い声を立てると、ふいにくるりと身を翻して、蹣跚たる歩調で露台の方へ出て行きました。その時彼は警部の手から遁れようと試みたのでしょうか、いいえ、遁げようとするには、あまりにも蹌踉たる歩調でありました。それは恰も、素晴らしい神の摂理の啓示に、酔えるもののような姿でありました。おそらくその時彼は、何も彼も打ち忘れて、一種恍惚たる忘我の境を彷徨していたのでありましょうが、その後ろ姿を呆然として見送っていた警部は、ふいにハッとするような事実を発見したのです。

そして、「新青年」と全集では、跛を引いていると気付いた警部の「――代さん！」という台詞が続くのだが、創元版・角川版では、台詞の前に「警部が今の今まで抱いていた疑惑の、最後の鎖はこれによって見事に粉砕されてしまいました。警部は思わず絶望したように、」と補足され、その後に「――代さん！　と一声鋭く絶叫しました。」と書かれている。

次は、代助は小舟に乗り移り湖へ行ってしまい、それを止められなかった警部の回想する場面である。「新青年」と全集では、「その警部といふのはかく云ふ私でありました――私はその時彼を引き止めようとすれば引き止めることが出來たのです。それだのに何故引き止めなんだのか、自分でもよく分りません。」となっている。一方、創元版・角川版では、「私はその時、彼を引き止めようと思えば引き止める事が出来た筈なのです。それにも拘らず何故そうしなかったか、自分でもはっきりその時の気持ちが分りませんが、おそらく私は、あまりの大きな悲しみのために、あらゆる思考力と判断力を打ちひしがれてしまって、唯もう白痴のように手を束ねているよりほかに仕様がなかったのでしょ

う。」と、推測が加筆されている。「おそらく私は、～」と推測を加えることで、悲しみの強さを表していると考えられる。

その次に、「唯これだけの事はハツキリと申上げておきますが、私は代助と同じ村に生れ、子供の時から彼を眞實の弟のやうに惠んでゐました。」という文が「新青年」と全集では書かれている。ところが創元版・角川版では、「何故また私がそれほど大きな悲しみに打たれたか、それは私だけの秘密ですが、簡単にいえば私は何物にも換え難いほど、深く深く代助を愛していたのです。ああ、少年時代から私達はどんなにお互いを愛しあっていたでしょう。二人は五つ違いでありましたが、それはほんとうの兄弟にも及ばぬ程の、強い、深い愛情が私達を結びつけていたのです。」となっている。前者では、弟に対する愛情であったとしているのに対し、後者では、同性愛的な感情をほのめかしているように見える。この時期に、こういった要素を横溝が作品に取り入れていたことはわかっているが、万造と代助とお銀の悲劇の後で、竹雨宗匠の思いを出して来るというのは、あまり必要な加筆ではなかったのではないかとも思える。

続いて、警部（私）が熱心に代助を探していた理由についての文である。「新青年」と全集では、「私が彼をあんなにも熱心に探してゐたといふのは、勿論職務からでもありました。けれども、もつと大きな理由としては彼を誤つた途からもとの正道へ引き戻してやらうと、唯そればかりを考へてゐたのです。」となっている。それが、創元版・角川版では、「こういえば私があんなにも熱心に代助を探していた理由もお分かりでしょう。むろんそれは職務からでもありましたけれども、もっとも大きな理由としては、彼をあの危険な途から、もとの平穏な生活に引き戻してやろう、それには是非とも彼を説いて自首させなければならないと、唯そればかりを考えていたのです。」と、補足されている。

次は、代助が「最早如何なる手段を以つてしても償ふことの出來ない大きな罪、殺人の罪を背負つてゐるのではありませんか。」と「新青年」と全集では書かれているが、創元版・角川版では、「大きな罪、殺人の罪」の後に「しかも二重の殺人の罪」と付け加えられている。その続きに、創元版・角川版では、「ああ、その時の私の悲痛、懊悩、絶望、――それはとても筆紙にも尽くせません。よく譬えにいう」と文が補足され、「新青年」と全集にも書かれている「腸を斷つ想とは全くこの時の私の心でありましたらう。」に繋がっている。

そして、警部（私）が両手で顔を覆っている場面である。その様子の表現が、「新青年」と全集では「呆然とそこに佇んでゐましたが、」となっているが、創元版・角川版では、「胸を剔られるような悲しみに打たれていましたが、」と修正されている。

それから、湖に漕ぎ出していた代助は舟が転覆し、沈んでしまう場面の表現にも加筆修正が見られる。「新青年」と全集では次のようになっている。

漸く氣を取直して露臺へ出てみた時、今しもかの恐ろしい浮洲の邊を漕ぎ進んでゐた代助の舟は、故意でありましたか、それとも偶然でありましたか、その時突如ぐらりと傾いたと見るや、代助はかの人をも物をも呑み盡さずにはおかぬ泥濘地獄の中に、眞逆様に墜ちて行きました。あなや！　と私が息を飲込んだ刹那、沛然として襲つて來た湖畔の驟雨が、紗のヴエールを懸け連ねたらむが如く、模糊として湖水の上を包んでしまつたのです。

一方の創元版・角川版では、以下のように加筆されている。

漸く気を取り直して露台へ出てみると、湖水のうえはいよいよ冥く、水は白い泡をあげ、凄まじいうねりを作って岸を噬もうとしています。その中を代助の操る小舟が、木の葉のように揺すぶられながら進んで行きます。

――危ない、代さん。

私は露台のうえから声を嗄らして叫びましたが、それが聴こえたか聴こえなかったのか、代助は尚も棹を操って進んでゆきます。その時遽かに真っ黒な風がさっと吹きおろして来たかと思うと、岡谷、下諏訪あたりは見る見るうちに濃い水滴の層に包まれ、湖水のうえには濃淡二つの竪縞が織り出されました。と、見れば斜めに水面を打つ太い雨脚が、凄まじい勢いでこちらへ近付いて来るのが見えます。湖水はますます怒り猛って、波立った浪頭は、数千の水蛇が鎌首をもたげたようです。

――危ない、代さん！

再び私が絶叫したとき、今しもかの恐ろしい浮き洲の辺を漕ぎ進んでいた代助の舟は、故意でありましたか、それとも偶然でありましたか、その時突如ぐらりと傾いたと見るや、代助の体は、かの人をも物をも呑み尽くさずにはおかぬ泥濘地獄の中に、真っ逆様に墜ちて行きました。あなや！　と、私が息を飲み込んだ刹那、黒い風を捲いて、沛然と襲って来た湖畔の驟雨が、紗のヴェールを懸け連ねたらんが如く、模糊として湖水の上を包んでしまったのでありました。

創元版・角川版では、「真っ黒な風がさっと吹きおろして来たかと思うと」や「黒い風を捲いて」という表現が加筆されている。この「黒い風」は、不吉なイメージを読者に与える。横溝はその雰囲気を盛り上げるために、象徴的に書いたのではないかと考えられる。

やがて、竹雨宗匠（警部、私）が全てを話し終える場面である。「新青年」と全集では次のようになっている。

竹雨宗匠は泪を飲むが如く、暫默然として桐火桶の中を視つめてゐる。湖水の上は今や全く夜色に包まれてしまつて、遠く對岸の町の灯が、芝居の書割のやうにしめやかに明滅してゐた。

創元版・角川版では、「〜視つめているる。」の後に「長物語の疲労のためか、それとも悲しい想い出のためか、何となく憔悴したように見える、淋しそうな横顔の陰影を、私は暫く無言のまま打ち見守っていたが、ふと眼を転じて見れば、」という文が挿入されている。また、「遠くの對岸の町の灯が」の部分は、「美しい宝玉を鏤めたような対岸の町の灯が」と修正されている。そしてその後、「竹雨宗匠は暫くして口をひらくと、次のような言葉をもって、この長い物語に結末をつけたのである。」と付け加えられている。

さらに、「新青年」と全集で書かれている「遂に彼等三人の死骸を發見する事は出來ませんでした。」の後に、創元

版・角川版では、

尤もそれから大分後に蜆舟の熊手の先に一度あの気味の悪いゴム製の仮面がかかったことがあるそうですけれど、漁師の迷信から、怖毛をふるって再び湖水の底に沈めてしまったそうです。それから間もなく、あの関東の大震災で、この辺もかなりの打撃を蒙りましたが、不思議なことにはその地震のために、湖水の底にも地層の変動があったと見えて、いつの間にやらあの恐ろしい泥濘地獄も姿を消してしまったようです。従って今では誰も、この無気味な事件の起こった場所を、適確にそれと示すことの出来る者は一人もいないのです。

と、補足されている。

竹雨宗匠が締め括る言葉として、万造・お銀・代助の三人が死後の世でどのようになったかについて、「新青年」と全集では、「そこまではこの私も知らないのです。――はい、知らないのです。」となっているが、創元版・角川版では、「そこまではこの私にも分からないのです」と簡素に修正されている。

最後に、「竹雨宗匠が静にこの長い物語を終へて、口を噤んだ時である。」と「新青年」と全集では書かれているが、創元版・角川版では、「さきほどから窒息しそうな気持でこの物語に聴きとれていた私は、竹雨宗匠の最後の言葉が切れるのを待って、静かに立って縁側へ出た。」と、視点が「私」になっている。竹雨宗匠から「私」に視点が移ったことで、物語の終わりとして、より客観的に仕上げているように思われた。

注

（1）中島河太郎「解説」（横溝正史『鬼火』昭和五〇・八　角川文庫）

（2）（1）に同じ。

（3）（1）に同じ。

（4）二上洋一「横溝正史作品事典」（『幻影城』五月増刊号、昭和五一・五）
（5）（4）に同じ。
（6）仁賀克雄「横溝正史論」（『宝石』昭和三七・三、引用は『幻影城』五月増刊、昭和五一・五）
（7）（6）に同じ。
（8）中島河太郎「解説」（横溝正史『鬼火』昭和五〇・八　角川文庫）
（9）横溝正史『鬼火』（『新青年』昭和一〇・二／三に分載。『新版横溝正史全集二　白　変化』昭和五〇、講談社）
（10）安間隆次「失われた神話の復権＝『鬼火』『蔵の中』をめぐって」（『幻影城』五月増刊、昭和五一・五）
（11）（10）に同じ。
（12）（8）に同じ。
（13）安間隆次「失われた神話の復権」（『幻影城』五月増刊・第二巻　第六号　昭和五一・五初出）
（14）中井英夫「血への供物　正史、乱歩、そして英太郎」（『日本探偵小説全集９・横溝正史集』昭和六一・一　創元推理文庫）
（15）日下三蔵「解説」（『怪奇探偵小説傑作選２　横溝正史集　面影双紙』平成一三・三　ちくま文庫）
（16）ウィキペディア「鬼火（横溝正史）」
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AC%BC%E7%81%AB_(%E6%A8%A9%E6%BA%9D%E6%AD%A3%E5%8F%B2)

＊付記　横溝正史『鬼火』の本文引用は、『新版横溝正史全集二　白蠟変化』（昭和五〇・六　講談社）による。第三章の第二節は『日本探偵小説全集９・横溝正史集』（昭和六一・一　創元推理文庫）、第三節は『「新青年」復刻版』昭和１０年第１６巻（平成四・二　本の友社）、『日本探偵小説全集９・横溝正史集』（第二節に同じ）による。